投避

湿った地下道を僕は歩いていたが
見え始めたものは出口の存在ではなかった
これこそ望んでいたものではなかったか
上を見上げても水滴が光る壁ばかり・・・
そうだ———
これこそが実在する世界の正体なのだ
そして僕がはばたく空間なのだ
この地下道の上を走り過ぎる車どもに何の用があろう
そして、あの無意味な空にも！
地上をうろつき回る生活人どもにも！
僕は嘲笑と侮蔑を我物としたのだ
それはモーツァルトに向けられて然るべきだ
あの浄化された諦念に向けて・・・
僕は階段を地上へと向かいながら
あるいは盲目となっていたのかもしれない
毒された者として・・・
地上は今や目映くもなく
法則に満ち満ちていたに過ぎなかった
そこを渡るために僕は橋を架けねばならなかった
幸福は乱されてはならない
たとえ、いかに欺瞞に満ちたものであろうとも
それ故に
橋を架けることには細心の注意が必要なのだ
羨望こそは最も有毒な影であるからには・・・

(1991.9.13)